

第 5 次南極越冬隊員 16 人の集団生活 に関する 2・3 の考察

松 田 達 郎*

SOME NOTES ON THE SOCIAL LIFE OF 16 PERSONS OF THE JAPANESE ANTARCTIC WINTERING PARTY

Tatsurō MATSUDA*

Abstract

The writer tried to investigate the social life of the wintering party of the 5th Japanese Antarctic Research Expedition.

1. The relation between the kinds of recreation or play of the wintering members and their working hours was studied. The members having night duty had less kinds of recreation or play than the other members.

2. The words in vogue were recorded and their origins were analysed. It was known that the word in vogue originated mainly from the favorite saying or a slip of the tongue made by a party member.

3. The nickname related to the age of

the party member. The younger members were apt to be called frequently by their nicknames.

4. It was recognized that at meals the age of the member and his working hours related to the sitting position at table. The position of the member was generally arranged in the order of the age of the member and it was noted that the position of the member having night duty was not stable.

5. Psychological experiment was tried by food-test. The cakes or confections sufficiently prepared on the table were taken casually by about 45% of party members who happened to be present at tea time.

1956 年から 1962 年にわたって行なわれた日本の南極観測のうち、1957 年 (第 1 次)、1959 年 (第 3 次)、1961 年 (第 4 次)、1962 年 (第 5 次) の 4 回の越冬観測が実施された。

1 月に観測船宗谷から昭和基地に運ばれ、翌年 1 月新しい越冬隊と交代するまで、一般社会と隔絶された 1 年間の越冬生活が続けられる。そこには 1 年に数度飛行機で訪れる外国越冬隊員数名があるだけで、外部からの連絡は銚子無線局経由の無線通信、NHK 南極向け放送 (約 20 分、1 日おき)、その他の南極基地との定期的な通信があるにすぎない。隊員に入ってくるいろいろの情報量は、これまでに経験したものに比べて、雲泥の

* 国立科学博物館極地学課. Polar Section, the National Science Museum.

差がある。従ってここにおける集団社会は越冬者だけの社会とみなして差し支えないであろう。

越冬隊員の中で2度の越冬経験者は第3次と第4次に1人ずつ、第5次に3人となっている。これも続けて越冬したのではなく、一たん日本へ帰り、半年の日本滞在期間を持っていることは重要なことであろう。このような越冬経験者のいることはいろいろの点において作業の能率をあげるようである。

初めての体験ということは極度の緊張を伴うものであり、万事慎重である。第1次の越冬隊員達は昭和基地における毎日の気象変化、四季の移り変りに従う多くの予測できない自然現象に対応しなければならなかった。一步基地を離れて海氷上や大陸を旅行するとき、気象はもちろんのこと海氷上のクラック（割れ目）、大陸氷原のクレバスなど、未知のことがあまりにも多かったと思われる。1つ1つ新しい経験を加えてゆき、第5次の越冬隊は大陸奥地へ入ること1000 kmの調査旅行をするまでに至った。これだけのことができるためには、旅行に対する十分の予備知識を持っていることはもちろんのことであるが、昭和基地での生活が緊張感のない普通の生活状態になっていたからではなかろうか。

どこの国でも南極探検隊といえ、髪や口ひげを伸ばしたり、口ひげをはやしたりした人たちがばかりを想像する。確かに日本隊にあってもそのような人たちが多かった。越冬隊員の中で髪や口ひげを伸ばした人たちの百分率を示してみると（Fig. 1）、第1・3次は90%であったが第4・5次には10%台に減少している。事実第5次隊員は3日～4日に1回はひげをそり、少なくとも2か月に1回は散髪もしたことなどから、日本での生活とさほど変りない状態を保つことができたように思う。緊張の中に過ごした第1次越冬隊から、第5次に至ってようやく平穏な生活へ移りかけてきたのではないかとと思われる。

筆者は第5次南極観測隊の一員として越冬隊16人に参加し、この集団の中で生活し、その中から集団としてのいくつかの現象をとりあげてみた。いろいろの職場から集まってきた混合集団のため、越冬成立後3か月位の間は気分的にもおちつかなかったが、半年も経過するとお互いの気心も知れて、16人の生活もようやく軌道に乗ってきたように思われたので、1961年7月

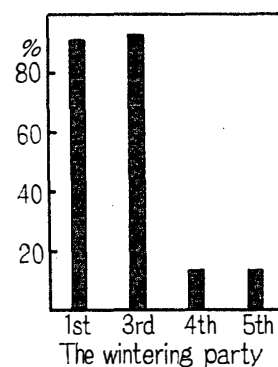


Fig. 1. The person who let his hair or mustache grow long.

下旬に資料を集めた。ただしこの報告のなかで 1 年間にわたって得たものも若干ある。

6 月から 7 月にかけては 16 人がいっしょに昭和基地内で生活する状態が続き、これを過ぎるとクック岬、大陸奥地の調査旅行が始まり、越冬終了まで基地内には約半数の人しか残されない (Fig. 2)。しかも 5 月から 7 月上旬にかけては太陽のでない期間となり、野外の作業も少なく、16 人がほとんど基地内だけで生活する。従って 7 月下旬頃は集団社会の調査をするには最も適当した期間であったろうと思われる。

この資料はアンケートによらず、筆者自身の観察により、観察する事項は各隊員に知らされることはなかった。

1. 娯楽について

基地には 300 冊あまりの単行本があったが、そのほか個人の携行したものや雑誌類を入れると 400 冊は越えると思われる。本は食堂のある棟におかれてあり、各人の個室へ自由に持って行って読むことができる。レコードは約 250 枚あったが電蓄が食堂においてあったので、音楽鑑賞はもっぱらここで行なわれた。従って食事時間と夜の休憩時間がこれにあてられた。

このような室内での個人で楽しめる娯楽のほかに、散歩、スキー、マージャン、カラム、碁・将棋なども楽しい遊びのひとつとなっている。Fig. 2 にはその傾向を月別に示した。越冬当初は仕事に追いがけられたせいもあるが、遊びも少ない。しかし終りに近づくに従って遊ぶことも多くなるのは生活に余裕のできた証拠ともいえよう。太陽の出ない間は散歩やスキーにでかけないが、これらは太陽が上り始めると盛んになってくる。宗谷船内によく流行していたカラムは越冬当初しばらくは盛んであったが、5 月以降はほとんど行なわれなかった。そのかわり夕食後 1 時間半位開帳するマージャンが流行し、これは越冬の終りごろまで続いた。マージャンの経験者は半数しかいなかったが、ほとんど全員がこの遊びを覚えた。金を賭けるわけではなく、単純な遊びとして過度にならない程度であるならば健全な娯楽の中に入れてよいのではないかと思われた。碁や将棋は 2~3 人に限られており、よほど好きなもののみがやっていたようである。

レコードを聞いたり、本を読んだりするのは個人で好きなようにして楽しめるものであるが、集団としての娯楽の中で王座をしめるのはやはりなんといっても映画であろう。第 1 次越冬隊のときからつぎつぎに持ち込まれた娯楽映画 (16 mm) が合計 50 本あった。しかしその上映は土曜日の夕食後ということに約束された。土曜の夕食には 1 人 0.5 合

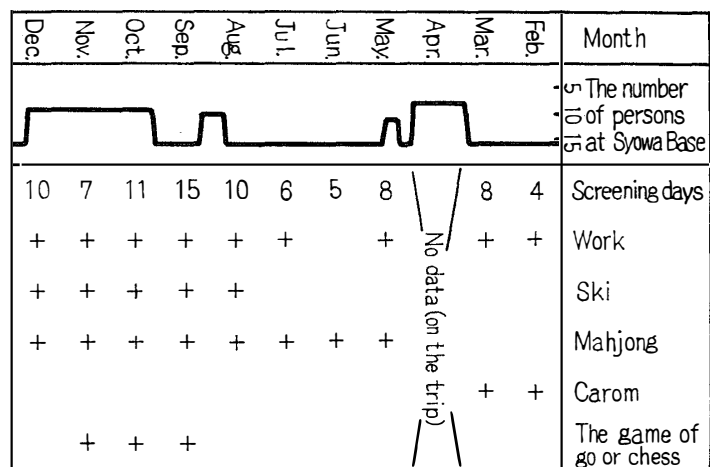


Fig. 2. The number of persons at Syowa Base and the inclination for recreation or play.

ずつ日本酒がでる。週 1 回の入浴日でもある。そのあとで映画を楽しむことになるが、実際に上映された日数を Fig. 2 に示してあるところによると土曜日だけ上映されたのは 2 月だけである。他の月にはいろいろの名目で上映されてその日数は多くなり、4 倍近いときもある。Fig. 2 の基地内人数と対応しながら上映日数をみると、旅行にでる前、帰ったあとの月が俄然多くなっている。出発の前の忙しい準備の最中でも映画の見だめはしたいという心理、帰ってからは今まで見なかった分をとりもどそうという心理、一方留守部隊としては旅行隊の苦労をなぐさめようとする心理、旅行隊がでたあとの手持ぶさたのときに上映しようとするなどいろいろの原因が考えられるが、土曜日 1 回の原則論は隊員それぞれの意向で変わってしまった。

これらの映画上映もすべての映画について平均しているのではなく、それぞれの好みがあって上映回数も多くなるものがある。1 回も上映されない映画はなかったが、それぞれの映画回数を Fig. 3 に示した。4 回上映されたものが 1 本あるが、2 回上映されたものが圧倒的に多く、Fig. 3 にみられる頻度分布では、ある特定の映画だけに集中しているような傾向は示されていない。比較的上映頻度の多い映画は喜劇的な楽しい娯楽映画で、悲哀なもの、深刻なもの、教訓的なものは敬遠されがちである。

いくつかの娯楽について示してきたが、次の 5 つの遊びについて調査してみた。すなわちマージャン、スキー、カロム、散歩、碁・将棋などで、これらはみんなでいっしょに

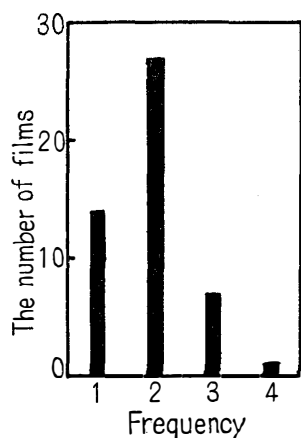


Fig. 3. The frequency of the screening.

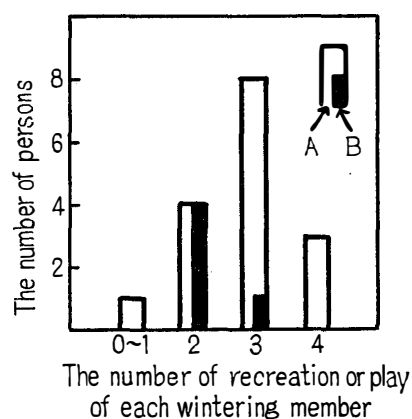


Fig. 4. The relation between the kinds of recreation or play of the wintering members.

A: All the members.

B: Men on night duty.

行なう遊びなので観察するのも好都合であった。

これらの遊びの内、個人がいくつの遊びを持っているかということを Fig. 4 に示した。5 つの内 3 つ持っているものが最も多くなっているが、ここで注意すべきことは夜間の勤務もしくはそれに準ずる観測・業務に従事する人の遊びの数が少なくなっていることである。夜間の観測をするといきおい昼間に寝ることになり、みんなといっしょになるのは 1 日のうちでも後半だけとなる。しかも昼間の明るい時間にも恵まれないので、遊び方にも制約がでてくるように思われる。

2. 流行語について

普通の一般社会をみても、その時代に特有な言葉が生まれては消えていく。これらはラジオ、テレビ、新聞、雑誌、映画、レコードなどマスコミを通じて広がっていく場合が多いであろう。一方学校や工場その他小さい集団においても、そこに特有な流行語を持っている場合が多い。しかしこれらの集団はお互いに開放的であり他の集団との交流が多く、これによって影響されることもあろう。

昭和基地の 16 人の集団社会では前にも書いたように、1 年間他の社会とは隔絶され、

閉鎖的な 16 人だけの集団社会が形成されるとみなしてもよいであろう。

毎日のようにいやでも入ってくるマスコミの影響もなく、従って話題も少なくなるが、その反面面白い話であると何回もくりかえされることも多い。そのような雑談のなかに不用意にとびだしてくる面白い言いまわしをとらえて、その口真似をする。最初にそれをとらえて言いふらすのが「言語ボス」であろうが、そのような言葉がいつのまにか隊員の間に流行するようになる。

このようにお互い同志の言い草が通用するようになったもののほかに、基地でみる映画の台詞、レコードの歌い文句、小説などからくるものやソ連隊などからの言葉もあった。このような流行語を、その発生源別に分類してみると Fig. 5 のようになる。具体的な例を示すと次のようなものがある。

(A): ヒーヒー、泣きだよ、そうよそうよ、...よう...
よう、帰りたいようお母ちゃん、ぼやく、キャンキャン、ガッテム、終りまん、あなたあ、デポで押す、一八(いっぱち)。

(B): ソーリー、オフコースよ、落ちめやなあ、おーたー、かなしいなあ、またな!、あらあー、メエはねえ、そうよ今わかったの。

(C): 百だなあ、ハラショウ、チョンボ。

流行語の一部をあげたのであるが、個人の口ぐせのうつったもの (A) が最も多く、映画や小説・レコード

(B) などからくるものがそれについている。その他 ソ連隊などからくるもの (C) もあるが少ない。

このように娯楽としての映画などからくるものも多いが、やはり隊員相互間の言葉のやりとり、すなわち干渉作用が最も大きく影響しているように思われる。

外部からの導入もなく、持っている映画を繰り返して見たり、隊員相互に演ずる言語動作に絶えず接触することによって、日本ではみられないような 16 人だけに通ずる流行語が発生し、維持されるのであろう。下品な言葉でも女性のいない男ばかりの社会では下品という規準もとれてしまって、さしたる抵抗もなしに通用するのである。こんな流行語は

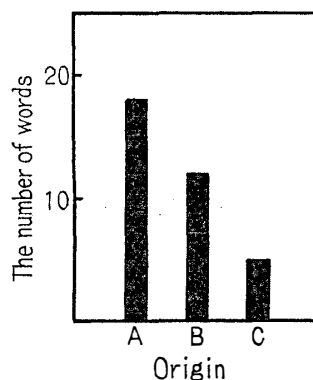


Fig. 5. The origin of the word in vogue.

A: From the favorite saying or a slip of the tongue made by the party member.

B: From the moving picture, the novel and the phonographic record.

C: From other sources.

16 人全部が使っているのではない。一部のものの使用が目立っているが、とも角理解するという点では全部に共通であり、この社会のもつふんい気がかもし出されているように思われる。

このような流行語は第 3 次越冬隊にもあった。越冬を終えて引き揚げてきたとき、筆者は第 4 次隊として宗谷船内で迎えた。しかし、100 人以上もいる宗谷の中に入ってくると、その言葉の使われる頻度も次第に減少していったようである。第 5 次隊の常用していた流行語も、いったん昭和基地を離れ宗谷船内に帰ってくると間もなくその使用頻度が減少していくのが感じられた。このような運命をもつ言葉ではあるが、これらの言葉は 16 人が閉鎖社会を作っていたからこそできたものであろう。

3. 呼び名と年令

隊員が昭和基地に着いて、ようやく越冬生活に入ろうとするところ、お互いの名前をさんづけで呼ぶのは面倒だから、あだ名をつけようということになった。

宗谷の中ですでにあだ名をつけられているものもあったが、ここで始めてつけられたものもある。適当につけられた呼び名であるし、特に意味をもたせたものはなく、呼ぶ方も呼ばれる方も抵抗を感じることなく、受け入れられるようなものであった。

ところが半年も経過すると、そのあだ名を使われる人と使われない人がでてきたことに気づいた。これらのことについて集計してみたのが Fig. 6 である。

あだ名で呼ばれる率の多い人 (A)、あだ名と本名を半々に使いわけされる人 (B)、本名で呼ばれる率の多い人 (C)、職名でよばれる人 (D) の順に集計してみた。あだ名で呼ばれる率の多い人が最も多いが、他は 2・3 人程度である。この 4 つのグループについてそれぞれ平均年令をとってみた (Fig. 6, 黒丸) ところ興味あることが認められた。

すなわち職名でよばれる人が最も高令で、本名で呼ばれる人がそれに次ぎ、本名とあだ名が半々でよばれる率の多い人、あだ名だけで呼ばれる人の順に若くなっている。本名とあだ名を半々にいわれる人というのは中間層の年令で、年上のものからはあだ名で、年下のものからは本名でよばれる傾向があった。あだ名で呼ばれる人の中に割合に高令のものもいるが、一般的に言って年令によって呼び方が方向づけられるように思われる。

この傾向について村山雅美隊長と論じた結果、第 3 次越冬隊についても調査してみることにした。

当時の隊長であった村山隊長の記憶の中から集計してみたところ、Fig. 7 が得られた。

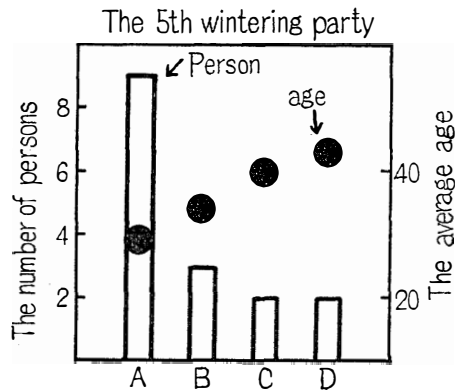


Fig. 6

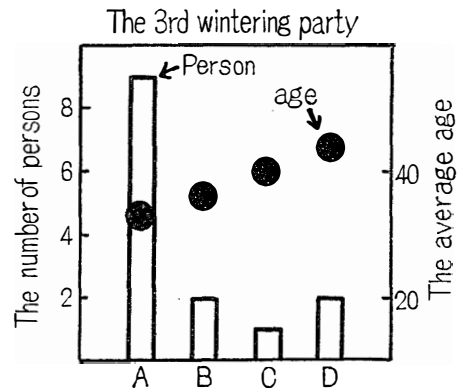


Fig. 7

Fig. 6 and Fig. 7. The nickname and the age.

A: The person called by his nickname.

B: The person called by his nickname or his real name.

C: The person called by his real name.

D: The person called by the name of the occupation.

これは Fig. 6 に示した第 5 次隊の結果と全く同じ傾向を示すものと思われる。

われわれの南極観測隊は大学、研究所、現業官庁、公社、会社などからのいろいろの職種の人たちで成りたっており、限られた期間だけ南極観測に従事する。従ってここでは学歴も、履歴もあまり問題にはならない。秩序保持の上には年令的の要素が最も自然に受け入れられるもののようである。風呂に入る順序など、年令順になっているものがかかなりあったようであるが、これが特別支障をきたすようなことがなかったのはこのためでもあろう。

4. 食卓位置

1 の項で個人の遊びの数において、昼間勤務の人と夜間勤務の人との間に違いのあることを指摘しておいた。3 の項では呼び名が年令秩序と関係のあることを知った。これらのことから勤務時間或はその状態と年令ということは、社会構造をみるためには重要な要素になっていることを考えなければならないように思われる。この 2 つの要素が共に影響している現象をとらえることができた。それは食卓につくときの位置の問題である。

食事のときは食堂に集まり、いっしょに食卓について食事をする。その食卓につく位置

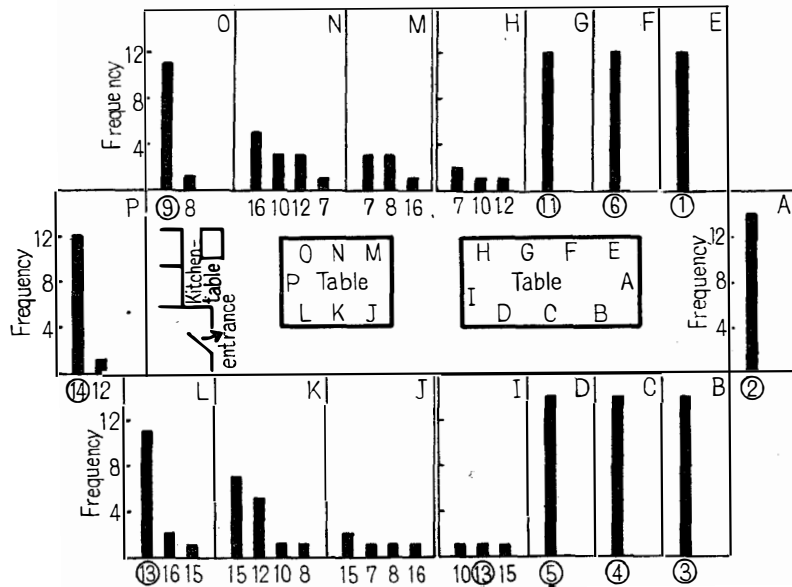


Fig. 8. The sitting postions at the table (A, B,.....O, P).
The person is given the number according to age.
The number enclosed with a circle shows the person
on day duty and the other one shows the person
on night duty.

を約 10 日間にわたって調査した。食事をすることは各人にとって基本的に重要なことであり、食べ物の種類、容器、場所などいいかげんにすまされるものではない。やはりゆっくりとくつろいだふんい気で美味しいものを楽しい話題をもちながら食べたいものであろう。閉鎖環境の越冬生活ではなおさらそれが切実なものになってくるように思われる。

われわれが越冬を始めるとき、食卓の坐席については決めなかった。村山隊長だけは以前からの習慣で一番奥のところに位置を占めていた。他の人はどこに坐ってもよかったのである。越冬当初はどこに坐るかなかなか決まらなかったが、2~3 か月経過するにしたがって坐る場所が固定し始めたように思われた。その間にはいろいろと変遷があったようであるがその資料はない。越冬後 6 か月経って、食卓のそれぞれの坐席 (Fig. 8; A, B, ..., O, P まで) に坐る各人の頻度をとってみることにした。

朝食時には全員が集まらないし、また和食と洋食の 2 卓に分かれるので、昼食と夕食のみについての結果を示した。なお昼食時と夕食時の傾向をみるとほとんどそのすわる傾向には変わりがみとめられないので合計して図示した (Fig. 8)。

Fig. 8 の A, B,……, O, P はテーブルの坐席位置を示している。また各食卓位置における頻度分布図では人名を記入せず、数字で示した。これは 1, 2, 3,……, 14, 15, 16 の順に若くなるようにした。なおこの数字が円内にあるのは昼間勤務の人で、他は夜間勤務またはそれに準ずる仕事に従事する人をさしている。

A の場所に坐る 村山隊長のまわりには 昼間勤務の人たちが坐る。一方同じ 昼間勤務の人がその反対側の方へも坐っているがこれは若い人たちであり、隊長のまわりは高令の人たちで占められている。

夜間勤務に従事する人たちは、昼間勤務の人たちにはさまれた場所に位置を占める。これは時間に制約されたり、定刻に食堂に集まれないために起こったことも考えられるが、この人たちに共通な場所が丁度 2 つの食卓の真中にあることは興味ある現象である。昼間勤務の人たちの坐る位置はほとんど固定しているのに反し、夜勤もしくはそれに準ずる仕事をもつ人たちはその坐席につく頻度から判断して固定していないのである。この状態は越冬の終りごろまで続くのでこの期間だけのものではない。この場所での坐り方をみるとお互いに代わりあって坐ってはいるが、早い者勝ちに空席を埋めるというのではなく、人によって何となく頻度の高いところのあることに気づく。第 8 図の中で N, M, H, 及び K, J, I の順に比較してみるとそれぞれ O や L の位置に近いほど坐席占有の頻度が集中的になる傾向がみられる。それは高令層の坐っている方より若令層の坐っている方へ坐ろうとする傾向性のあることを示しているように思われる。

以上のような観察から年令と勤務状態ということが食卓の位置をきめるのに役立っているように思われる。一般の社会では、食卓の位置に限らず、学校、会社などの会議の席をみてもそれぞれの独特の要因に支配されて決まるもののようであるが、ここでは 16 人の社会構造の一面をみるという立場で観察してきた。

5. 食品嗜好における集団心理

食べ物の嗜好ということを利用して集団心理の一面をとらえて実験を行なってみた。

昭和基地の一般的な環境については前にも述べたが、もう 1 つ重要な問題がある。日本を出発するとき、すべての食糧、衣服、装備、文房具などにいたる一切の消耗品は一括購入し、基地ではその在庫を特定の管理者のもとで使用するのである。すべて 1 年間の消耗予定量を想定し、購入してきてあるが、公平を期するために配給をするものもある。大部分の食品は自由に持ち出すことができるが、酒だけはその量に制限があるため厳重な

配給制をとった。いずれにしても基地では購入することではなく、1 年の間金を使わない特殊な社会環境におかれることになった。このような環境になれてくると、金で計算する経済観念はだんだんうすらいでくるであろう。金の価値を忘れるわけではないが、いわゆる切実な経済観念からは遠ざかっていくと思われる。6 か月もたてば食べなければ損だというような考えが少なくなり、ここにあるものはいつでも食べられるという考え方に変わっていくように思われる。その上お互いの気心も知れ、食べ物などについての遠慮などはほとんどなくなってしまう。

昭和基地にある食品について、ちょうどそのような経済慾が少なくなってきた時期をとらえ、次のような実験を試みた。

だれかがうまそうに食べていると、ついそれを口にしたくなる。逆にこれはうまくないと言うと、何となくまずいような気がする。このようなついつられて食べたりする現象をとらえるためにチューインガムを主として、その他いくつかの菓子を用いて実験してみた。

夕食後食堂に集まってお茶をのんだり、遊んだりしている時をとらえ、あるグループの 1 人が机の上に放り出したチューインガムを食べ始めると、そのグループのうち何人かがそれに同調してガムを食べる。始めのうちは食べるのは特定の人に限られるかと思ったが記録によると限られた人ではなく、全く任意に食べていることがわかった。そこでそのグループのうちで、何人が食べたかということだけに注目して観察したところ、Fig. 9 に示すような結果が得られた。

もしそのグループ全員が食べると点線で示された直線（がめつい線）上にデータが並ぶはずであり、だれも食べなければ 1 人のところで横軸に平行な線（遠慮の線）になるであろうが、この図ではそのどちらでもない直線になっている。人数がもっと増加してくる場合はこれとは違ってくとも考えられるが、ここで扱っている位の人数では直線とみなして約 45% の人がついつられているという結果が認められる。

例は少ないが、かりんとう、南部せんべいによって得た資料も図示してあるが、チューインガムで得られた傾向性と違っているとは言えない。ここで使用したような食品の間では、ついつられて食べる集団心理の動きの上に差異を及ぼすほどのものはなかつようである。試験食品は 16 人にとって共通の嗜好傾向があるように思われる。

16 人も居るとそれぞれ個性をもった人が多いのであるが、集団をつくることによってその集団の心理のまにまにひきずられ、お互いに無意識のうちに作用し影響され合っている姿をこの図によって量的につかむことができるように思われる。

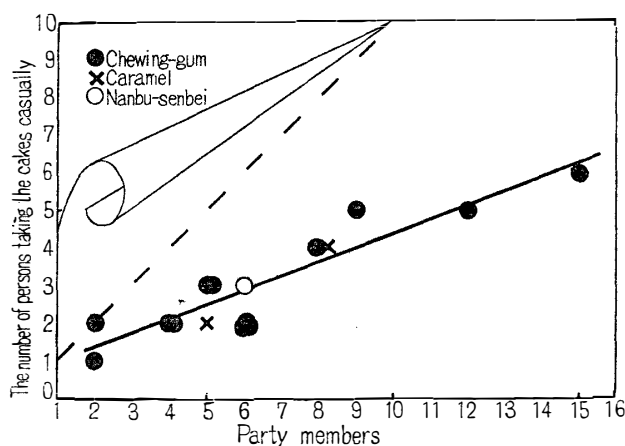


Fig. 9. The psychological experiment by the food test.

あ と が き

第 5 次越冬隊の集団社会について、いくつかの性格をとらえてみた。ここでは南極観測の各専門の作業内容については触れなかった。筆者自身がこれについての十分な知識ももたず、その評価もできないためである。又各個人の性格や心理の動きについても観察をしなかった。決してこの集団社会と関係のないこととは思わないが、筆者としてはこの点からは避け、集団としての現象だけを追求した。今までに指摘してきたことは 16 人だけで、1 年間隔離された生活があったために、よく条件付けされた状態でみることができたものである。といってもこのような現象は昭和基地 16 人だけの特殊な集団性ではなく、一般の社会でも複雑な要因の支配をうけながらもこのような現象がその底をながれているのではなかろうか。

第 1 次から第 4 次までの越冬隊についてはいろいろのことは聞いているが、直接観察の対象にすることができなかったので論じられないが、第 5 次隊においてはきびしい自

然の中における南極越冬生活とはいいいながらも、平凡な人たちによる平凡な生活ができる
きざしが見え始めていたと言えないだろうか。

この調査を行なうにあたり昭和基地において終始激励と助言を賜った村山雅美隊長，生活を共に
した隊員諸氏に深く感謝する。この報告について終始御指導をいただいた東北大学理学部加藤陸奥雄
教授に深謝する。

(1963 年 2 月 9 日受理)